



終わりは、次の始まり

Life is a series of beginnings

永田円了

落ち葉はなぜ落ちるのだろうか。別に風が吹いたからではない。重力のせいでもない。免疫学者、多田富雄氏は次のように言っている。「葉のつけ根の組織が季節を察知し、遺伝子のプログラムを働かせて死ぬために、落ち葉はボトリと落ちる。何億年も繰り返された自然の恵みの儀式である。」「死の遺伝子が働かなくなると、不死の細胞ができてガンになる。生命が生き続ける裏側には、必ず死が存在する」と。

自坊の栴(ソメイヨシノ)が、なんと秋のこの時期に花を開いた。ビックリである。理由は簡単、この夏にアメリカ・シロヒトリが絵出で、我が寺の栴の葉を全て食ってしまった。その結果、栴は“葉が落ちた”と勘違いをし、3ヵ月後の今、花を咲かせたのである。終わり(落ち葉)が来れば、すぐ次の始まり(花)がスタンドバイをしている。たとえ季節が春でなくても。

終わりがないと次の生が始まらない。ということは、次の始まりをスタートさせるためには、終わりを自らの手でつくる必要がある。



断捨離



断捨離(ガラクタを捨てる)は、何故いいのか? 気分がスッキリする? その通り、頭も心も軽くなる。では、なぜ断捨離は人の心を軽くさせるのか?

米国のスピリチュアル・ドクター、キャロリン・メイスは次のように述べる。「私の周りの物すべてが、たとえタンスの引き出しに入っていて見えない物さえも、全てが心と見えない糸で繋がっている」と。ということは、その見えない配線を通して、私たちのエネルギーがどんどんガラクタに流れて行っているのである。つまり、大切な、大事なエネルギーが垂れ流しになっているということなのである。

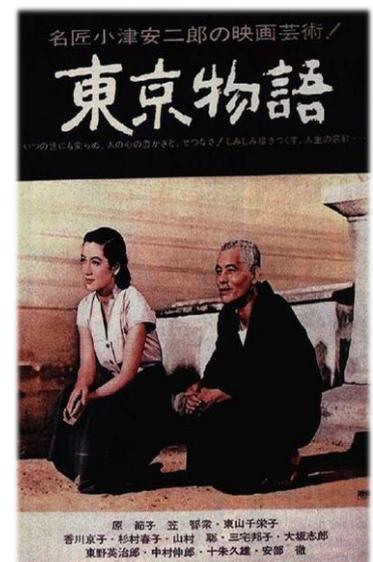
断捨離をするということは、このエネルギー漏れを遮断し、気を元にもどす作業なのである。このことを“元氣”を取り戻すという。とは言っても、大切な友人からの便り、贈り物、写真などはなかなか捨てられない。

数年前、15年間溜め込んでいた年賀状を思い切って焼いた。般若心経を挙げながら、2時間かけて燃した。これをキッカケに、“一見大切なもの”の多くを処分した。雑多な物がなくなった部屋に入ると、まあ何と心が軽くなることか! さあ、何かしようか、という気持ちになれる。不思議なものである。

終わりがきちんと行われる時、次のスタートラインが見えてくる。

<事例>

日本映画 1989年「利休」/ 利休と家康、物事に最後はないでしょう、
多田富雄/ 落ち葉は何故落ちるのか
福岡伸一/ 生命は自ら壊してつくる
NHK クローズアップ現代「断捨離」/ 大切なものを見つけるために
養老孟司/ 中世鎌倉時代の絵巻、「九思詩絵巻」 人の身体は、思うようにならない究極の自然
日本映画 1953年「東京物語」/ 第三フェーズの視点で観る
NHK クローズアップ現代「もう一旗揚げたい、増えるシニア起業」
ガンガジー Gangaji / 認知的不協和 The Value of Cognitive Dissonance
美空ひばり/ 一筋の道を迷うことなく
大河ドラマ「武蔵」/ 沢庵和尚、武蔵(たけそう)、迷え、迷え、迷え
ダイアナ・ロス Do you know where you are going to?



東京物語を、第三フェーズで観る